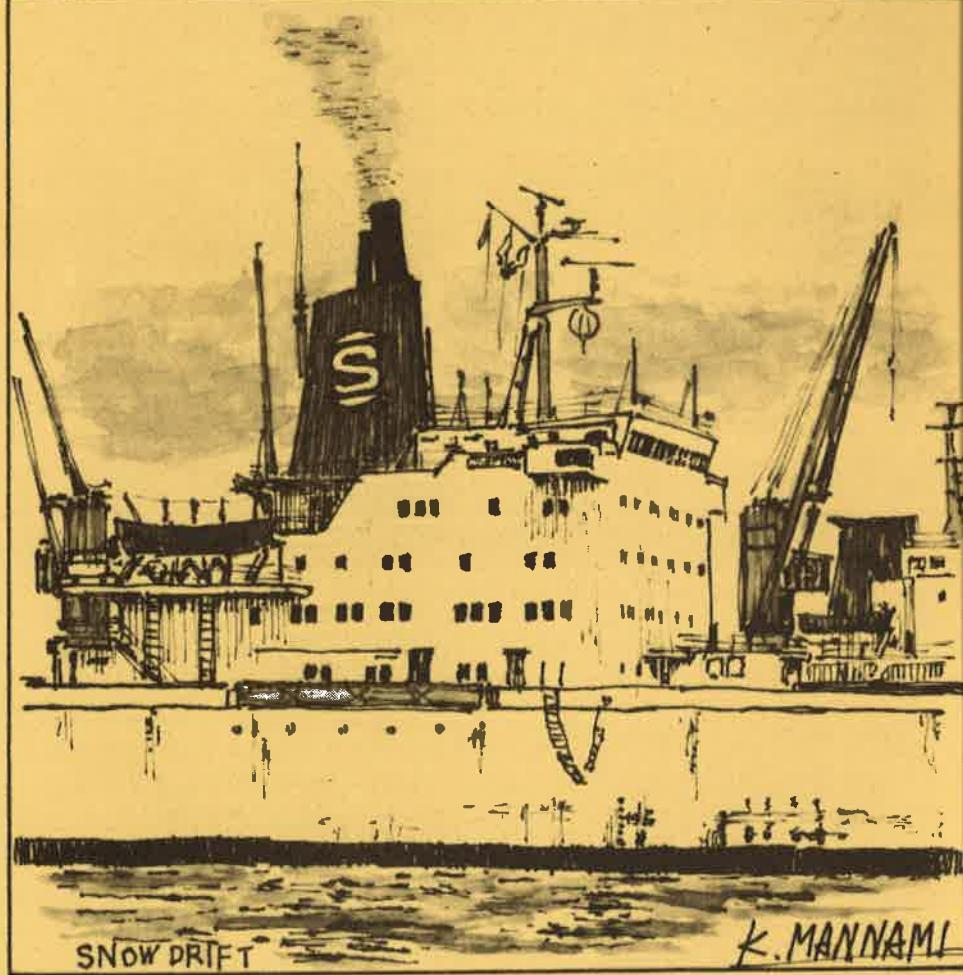


月刊・ブルーアンカー――

Blue Anchor



第8号

海文堂書店 1982・9[8]

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10
(電) 078-331-6501

III

次

長崎空港にて	植村 達男	2
山陽路行	海老原 明美	4
私の観たユングフラウ（スイス）	角本 稔	7
「書店にない本」ライブライリー開設にむけて	大阪で本をつくる会	...
PEARL OF SCANDINAVIAから今日は!!	小島 公平	...
ぶっく・えんど
郷土誌の窓
海文堂案内版

長崎空港にて

植村達男

長崎と佐世保での仕事を終え、私は鹿児島へ向うために大村市にある長崎空港へ来ていた。この七月十六日のことである。空港の出発ロビーで待っている間に、私はふと諫早市に住んでいた作家で、昭和五五年に四二歳の若さで急逝した作家野呂邦暢の遺族の名前が、電話帳にどういう風に記載されているかを確かめてみたくなつた。

ロビーにある黄色電話の台の下に、あまりぶ厚くない長崎県の電話帳が重ねてあった。諫早市のページをめくりながら「野呂邦暢の本名は納所邦暢でだった」などと思ひながらみていくと、「の」の項のほど最後の部分に、次のような記載があつた。

野呂邦暢（著述業） 三一四四四八
納所邦暢（著述業） 三一四四四八

電話帳にはペンネームと本名が二行並んで出ていたのである。仮に、諫早市に野呂太郎という人物が住んでいたとする、こういう現象は生じない。野呂太郎の名は野呂邦暢と納所邦暢の間に、わりこんで記載されてしまふこと、諫早市の人口が、七万余とそれほど多くないことから生じた過然の仕業である。

ところで、昭和五五年五月七日に亡くなった野呂邦暢の名が、二年余を終た今日、何故電話帳に記載されているのだろうか。私はあわてて電話帳の表紙を見た。昭和五五年十一月二〇日付となっている。野呂邦暢の死を電話帳へ登録するのが間にあわなかつたのだろうか。それとも別の理由があつたのだろうか。

腕時計をみると鹿児島行の便の出発時刻は、あと十分とせまっている。私の乗る飛行機は、すぐ目の前のガラス窓越しに見えている。私はポケットから十円玉を数枚出して〇九五七二一三一四四四八のダイヤルを回した。諫早の野呂宅、いや納所宅でベルが鳴っているのが受話機を通じて聞える。十回位ベルが鳴っても、人が出る気配はない。ベルの音を聞きながら、私は頭の中で、受話器に向つて何を言うべきかをまとめっていた。

有名な眼鏡橋は無残に破壊されてしまった。
私が再び長崎の地を訪れるのはいつのことだろうか。いずれにせよ、次に私が見る長崎の風景は、今回の集中豪雨の結果、野呂邦暢が小説や随筆で描いたものとは相当異つてしまつていよう。

一、自分の書いた隨筆集「本のある風景」（昭和五三年・勧草書房）に序文を書いて戴いたことにつきお礼を述べたかったこと……

受話器を置いて、もう一度ダイヤルを廻し直してみたが、とうとう誰れも出て来なかつた。そのうちに、出発案内のアナウンスがあり、私は塔乗を待つ人々の列の後につかねばならなかつた。

このことがあってから一週間経つた七月二二三日に長崎市内は集中豪雨に見舞れた。

野呂邦暢は小説や隨筆に度々原爆（昭和二十年・長崎）と大水害（昭和三二年・諫早）のことを書いた。今回の中集中豪雨で多くの人命と貴重な文化遺産が失なわれた。

山陽路行

海老原 明美

七月の終わりに、仕事で広島まで行った帰途、倉敷、神戸、京都を訪れる機会を得た。ひとり旅である。二年半振りの広島は大雨で、雨雲が西から東へ移ると同速度で移動したのか、倉敷他、どこに行っても、雨、雨の雨女旅行になってしまった。傘をさしての旅行は大荷物の私には辛かったが、その分、自分との対話の多い内面旅行が出来たようにも思う。

倉敷では、お定まりの、大原美術館、喫茶店エル・グレコ、アイビー・スクエアといったコースではあったが、特に大原美術館分館の日本現代画家の油絵は、前々から「出逢いたい」と思っていた作品が多くあったので、絵を前にした時は、旧知の人に出逢ったようで嬉しかった。小出栄重（「支那寝台の裸女」「Nの家族」）は植村達男氏の「本のある風景」でその人となりの一部を知

になりつつありながら、まだなり切れぬ自分の腹をさすつてみたりもする。

松本竣介の「都會」も、私には出会いたい作品の一つであった。私はこの人のブルーの色調が好きだし、画集等では作品を見ていたが、本物を見るのは初めてであった。この人の作品には都会人の「哀しみ」を描いたものが多くあるようで、関西で東京弁を聞いたような気になった。

他にも本館のエル・グレコやルオ、シャガール、ムンク等、好きな画家の絵群に逢つたが、それらについてはまた別の機会に筆をとりたい。

広島からの新幹線の中で本を読んだ。広島駅のキオスクで買った宮尾登美子の「一絃の琴」である。彼女の作品は、前々から読もうと思つていながら、手にするのを躊躇つていた。大学を卒業するまで商人の子であるのを認めるのが辛くて、小木貞孝先生とこのことでも言い合つたことがあった。師は山口瞳等、何人かの作家の名を挙げ、その一人に宮尾登美子を出したのであった。親の職業を恥じて何になると言われたわけだが、正論す

っていたし、また植村氏から小出栄重にまつわる話は二、三聞いており、「お噂はかねがねうけたまわつておりましたが…」という感じで、作品の前に立つた。

また関根正二（「信仰の悲しみ」）は、この作品も含

めて、昨年新宿の小田急デパートの「夭折の天才画家

関根正二」と村山槐多展で、彼の主要な作品は見ており、懐しい気持ちもあった。関根正二の作品を初めて観たのは、五年近く前である。渋谷のある画廊で、「自画像」他、小品を数点であった。その画廊主の好みで、そこに展示されているのは夭折した人の作品ばかりであった。その鬼籍薄のような作品群の中の、関根正二の「自画像」が、私を鋭く射るような目で見つめて、私は一瞬、そこに釘付けにされた。心のどこかで「早死」を希つていた私は、この人等と同じく、若く死ぬのだろうと思つた。今になって再び関根正二の作品を前にすると、彼の肉体に反して、精神は、死どころか、生を無理やりに手繰り寄せようとしているかに思える。女達の手を合わせて歩く様を、誰かは妊娠のようだと言つたが、彼女らの腹は、いったい何を孕んでいたのだろうか？ カトリック教徒

「先生がちゃんとした会社員の子だからそうおっしゃるんでしょう。」

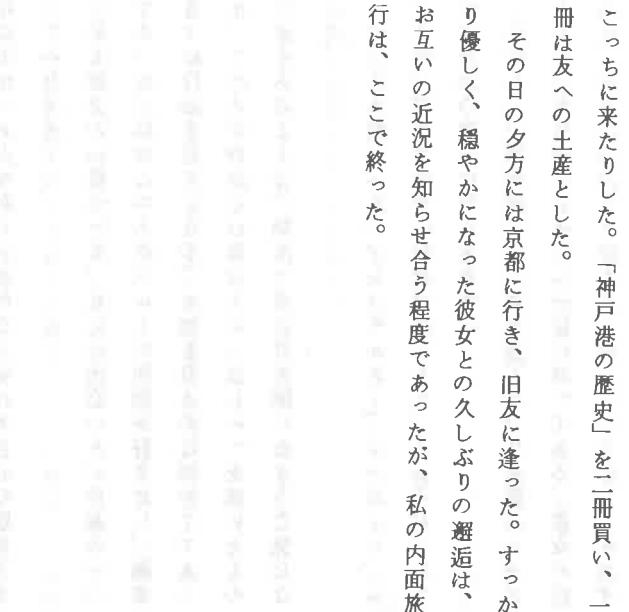
と、むくれた記憶がある。先生は、こちらの出方を分った上でおっしゃつていたのは承知していたが、私のコンプレックスは消えなかつた。

「一絃の琴」からは、宮尾登美子の生れ育ちを推し計ることは出来なかつたが、作品中に現われる女達のみどとな生きづぶりに、目を見はつた。強情な女は男から疎んぜられるが、芯の強い女達の凛とした人生に、また、頑なさに、美しい大和女を見た気がした。

次の日神戸までの途、隣りに赤穂の高校の校長先生が乗り込んで来、十分足らずだったと思うが言葉を交した。神戸で県の教育委員会の会合があるとかで、早めに行つて、剣道の稽古を一稽古つけてから、その会合に出席する旨、竹刀等一式持つておられた。母とほぼ同じ年のそな人は、戦後の右へ行くのを極端に嫌つて左へ行つたり、また右に行きかかつたりの教育界の波の中で、寡黙に生きておられるようだつた。

新神戸で新幹線を降り、雨の中異人館廻りをして、元町の海文堂さんに着いたのは一時ちょっと過ぎだったと思う。お目当ての小林さんはお会い出来なかつたが、海文堂さんの規模の大きさを知り、また、ギャラリーのある洒落た店内を、本好きの嗅覚で、あつちへ行つたり、こつちに来たりした。「神戸港の歴史」を二冊買い、一冊は友への土産とした。

その日の夕方には京都に行き、旧友に逢つた。すっかり優しく、穏やかになつた彼女との久しぶりの邂逅は、お互の近況を知らせ合う程度であつたが、私の内面旅行は、ここで終つた。



私の観たユングフラウ（スイス）

神戸観光汽船船長 角本 稔

アルプスの嶺が私に迫つてくる。

正面右手より「ユングフラウ（四一五八m）」、「メンヒ（四〇九九m）」、そして登山家が生命をかける、「アイガー（三九七〇m）」とその北壁の雪を戴いた岩肌が私達の乗つた登山電車の上昇につれ、実にワイドに見えてきた。

今日は昭和五十七年七月五日、場所はスイスアルプス。七月二日に、妻と共に大阪国際空港を出発、南回りで香港、ロンドン（途中、中東のバーレンに給油で着陸）、パリ、チューリッヒと飛行機を乗り継いで來た。搭乗時間は二十一時間であった。

しかしこれが船だとどうであろう。商船として最もスピードの速いコンテナー専用船（時速三十ノット、五十五m）を例にとると、南回りスエズ運河を通りドイツの

ハンブルグへ行くのに二十日間である。最近は燃料節約のため減速しているのでもっと日数がかかっているであろう。

しかし船と比べればジェット機は確かにスピードは速く便利だが、機内のスペースは船のそれとは比較にならないほど狭く、長時間シートに座り続けるので不自由である。歩くのはトイレとの往復ぐらいなもので、国際線は外国人も多く余分に歩けば変な眼で見られがちで、自然じっと我慢をせざるをえない。まるで食事とお茶等昼夜を問わず定期的に差入れされる動物園の動物に似たり。最初の内はそれもどの様なメニューかと、支給されるのが待された。時間の経過と共にその回数が重ねられ、現地に着く時分には少々うんざりとなり残す人もいたようであるが、私の胃袋の欲求はおう盛で出される品は全部たいらげた。

ヨーロッパはアジアやアメリカに比べれば気の遠くなれる程の距離だ。長時間座席に座り通しで足や腰に痛みを感じ、さすりながら行くのであるが、行けば歴史や文化の深さ、自然の雄大さ、生活様式の違いに改めて驚かさ

れ視野が広がる。私は去年の二月と今回で一回のヨーロッパ見聞である。

スイスは「スイス連邦」で人口は六三七万人、二十三の州で構成され、面積は四万一二八八㎢（九州よりやや大きめ）、首都はベルン市（一四万人）、周囲はフランス、西ドイツ、オーストリア、イタリアに囲まれた美しい山と湖の国である。永世中立国として認められ国連には加盟していないが、ILO、ユネスコの専門機関や、OECD、EFTAにも加盟している。しかし国民皆兵制（二十—二十五歳）で常備軍は置かず、非常時には六十二万五千の兵力が動員できる（日本では陸海空の自衛官が五十六年度末で二十七万一千人）。永い歴史の中で数々の異民族の侵略を受けた結果ようやくにして勝ち得た平和な独立国家を維持する気持がありありと見える。陸続きゆえの苦労であろう。経済では輸出の主力は時計など精密工業製品で観光収入も大きな財源。通貨はスイスフラン＝一二五円（以上'82訳売年鑑による）。

係で神戸っ子としては特に親しみを感じる。このチコリ

リッヒとは中世風の教会や住居、大銀行が軒を連ねる大きな湖や川の流れる落ち着いた街である。

七月五日ユングフラウへ向けバスでチューリッヒのホーテルを出発、人員は添乗人、ガイドを含めて三十七名で

女性が七、八割を占めるにぎやかなツアード。チューリッヒからユングフラウは南西方向にあり、ふもとの街インタークーベンまでは二〇〇km弱でチューリッヒ、アルガホ、ベルン等四つの州を越えるのだが途中にベルン市がある。このコースよりカペル橋で有名なルツェルンを通るのが最もポピュラーなのだが、今回はイターラーケンでショッピングをする時間をとったため

ハイジが住んでいたそう」と語っていた。

た（勿論エンタテインメントの話もある）

首都へルン市を右に見てから四十九軒で登山口インターチェンジへ。滋賀県大津市と姉妹提携を結んでいる。建物が山や湖の大自然にマッチしてとても美しい公園を思わせる小さな町である。

スイス金貨やチヨコレート等シミンクをし登山電車へ乗るべく、谷合いのラウターブルンネン駅へ行く。バスはここまで下山の終点グリンデルワルド駅へ回走するが、逆のコースをたどるツアーモロクニンゲンも少くない。いよいよ登山電車に乗り込み十一時一〇分出発。その時に渡されたパンフレットに見覚えがあり、驚きと懐しさがこみあげてきた。



ユングフラウの頂上（右側）

レットであった。「私もスイスへ行ってないので外国旅行の際には是非スイスへ行く」と言うと彼らもニコニコしながら聞いていたが、この様に早くチャンスがめぐつて来ようとは……。今ここで彼らに会えば何と言つて喜んで呉れるだろうか。

電車は高さ三〇〇mの滝を見て渓谷をぐんぐんとアルプスのふところへ吸い込まれるように登つて行く。先程ガイドは今日の山の天氣はやや悪くもう一つ良く見えないだろうと語つていたが、どうして、登るにしたがい薄もやが晴れ、雲一つない快晴となり、まるで絵葉書でも見ているのではないかと思われる程の美しさで私達を迎えた。

氷河が造つた深い渓谷、針葉樹林、高山植物が咲き乱れ、四千m級男性的岩肌の山並みが車窓一杯に広がり、どの様なアングルで写真に撮らうかと規模の大きさと美しさに戸惑うばかり。

私の乗つた電車はアプト式鉄道（スイス人アプトの発明した特殊の鉄道）でラウターブルンネンとベンゲン、クライネシャディック（一〇六一m）又はタリンデルワ



アイガー北壁と登山電車

ルドとクライネシャディックを結ぶ全長一九kmで一八九年、何と八十九年も昔に開通しているのである。

クライネシャディックまで登ればユングフラウ（四一五八m）、ユングフラウヨッホ（三四五四m）、メンヒ（四〇九九m）、アイガー（三九七〇m）とその北壁は目前に超ワイドで望める。アルプスの雄々しさ、気高さをひひしと感じる。特に快晴と空気が澄みきっているので余計である。商店でアルバイトをしている若い日本人に聞くと、この様な日は月に二、三度有るか無いかで実に好天に恵まれたものだ。

角閃石などから成るもの、広辞苑による）でできているのでとても固いのだが、これから登るこれらの山にトンネルがくり抜いてあると聞きその考え方と技術に一層の驚きを感じた。

さて少し気圧や酸素の気薄さにも慣れ、再びケーブルカーに乗りユングフラウヨッホ駅を目指したのが十三時五分。しばらくして山の喉元に入るごとくトンネルへと吸い込まれ延々と上昇する。

このユングフラウ鉄道もアプト式で一八九六年一九年一二年にかけて順次上部まで完成した。全長九・三km、トンネルの長さ七・一km（新神戸トンネルが約七km）最大傾度二十五%でアイガーコード（新神戸トンネルが約七km）まで登るのである。今から約五十年前にドルフブイエル氏が私財を投じて造つたものだそうちだが、その考え方と堅い岩盤をくり抜いた技術と忍耐力に頭が下がる。

途中アイガグレッチャー駅（一一三二〇m）で止まる。

ここでは北壁に開けられた窓から下界や岩肌が眺められる。岩には万年雪があり高原や遠くアルプスの連峰が見

える。

アイスマール駅（三一六〇m）からは壮大な「アレックチ氷河（深さ八〇〇m）」が目前に見え思わず息をのむ。

終点のユングフラウヨッホ駅（三四五四m）へ二時過ぎに到着。冷い風がトンネル内を吹き抜ける。歩いていたのが体がふわふわして揺れている変な気分になるし頭も少し痛い、つまり急に気圧の低い所へ来たので軽い高山病にかかったのだ。それもしばらくすると治まった。昼食の時にワイン、ビールは飲まぬよう注意されたが高山病防止のためからであった。体調の弱い人はどうにもならない程の貧血を起すこともあるそうだ。

一〇〇m上に展望台がありそこへ行けばユングフラウの頂きが目前だそうであるが、エレベーターが小さくしかも沢山の人があらわに並んでいるのであきらめ、さらに通路を進むと風が強くなりトンネルの出口があった。つまり雪原へ出るのである。その口へ出た瞬間原爆の光線でも浴びたような強い光で眼を開けておれない。雪や氷の光の反射である。外へ出る。驚くべき強い風が吹いている。雪の粉が顔に当る。とても痛い。はうようにして歩かな

を付けた。「森へ行こう」、「オ、ブレネリ」等も次々と歌われ、その歌声が山や高原に高らかにこだまして行った。

ければとても進めない。毛のふさふさした北極犬が三四平氣な顔をして寝そべっていた。
トンネル内をとって返し「氷の殿堂」へ行く。ここは氷河の中をくり抜いた室である。天井も壁も床も全部氷で出来ていて四方に通路が設けられ手摺りを伝つて歩くのだ。そうしなければたちまち転倒して頭でも打ちかねない。自動車の型をした氷の彫刻も置いてある。どうにか無事に見物し駅へ戻り「世界で一番高い駅」から日本へ絵葉書を送った。

下山を開始したのが一五時七分である。かつて十六年を費して岩を掘り抜いたこのトンネルも下山の時の速いこと。あつという間に抜けてクラネシャディック駅へ着く。メンヒやユングフラウを振り返つて見ると少し雲がかかっていた。

電車を乗り替えてグリンデルワイドへ下りるがアイガーノ壁がいつまでも右手正面の景色から消え去らない。それどころか益々良く見えるのだ。若い女性の間から期せずしてサウンドオブミュージックの「エーデルワイス」の歌が湧き起り私や妻もコーラスに加わりハーモニー

「書店にない本」ライブラリー 開設にむけて

・ 大阪で本をつくる会

日本人は本好きだ、というようなことをよく聞きます。誰が言い出したのかは知らないが、その本好きの日本人の中でも、関西人は特に本がお好きなようです。

ある調査によると、一人あたりの書籍購入数は関西が一番多く、一店での売り上げ日本一は、紀伊国屋書店の大阪梅田店だそうです。

私も関西人の一人ですし、本好きでも人後におちない自信はあります。

一冊の本の中には、自分の一生の何倍もの人生があります。冒険あり、ロマンあり、不可思議な美女ありで、人生の色どりとも言えます。

本好き、本狂い、本中毒、本バカなど、本好きにも様々な人がいますが、一体その本が「どこで」「どのようにして」作られ、読者の手元に至るのか、意外にご存知ないようです。

では、何故これらの本は書店にないのでしょうか。それは本の流通（製作者から小売店へのルート）がある一定のルートに頼っているからなのです。

書店の店頭にある本は、その大部分が「正常ルート」と呼ばれる、出版社（版元）→「取次店」→書店という流通経路で運ばれてきたものです。

一般の人にはこの「取次店」というものの存在はあまり知られていないようです。

「取次店」というのは、他の業界では「卸屋」にあたるもので、全国で約五十社（三十五社という説もあります）あります。全国で約五十社（三十五社という説もあります）あります。全国で約五十社（三十五社という説もあります）あります。

ます）あり、その中でも特に「六大取次」といわれる会社が、出版界に絶大な力を持っています。

その六社とは、次のとおりです。

東京出版販売（俗に東販）

日本出版販売（俗に日販）

大阪屋

栗田出版販売

中央社

日教版

この六社の中でも、東販と日販で約八十%を扱っているといわれます。

つまり、この大取次を通らない、もしくは通してもらえない（ほとんどこれです）本は、書店にないわけです。なぜ通してもらえないかを説明しますと、残念ながら

長くなっていますので、ここでは「大取次を通らない本」＝「書店にない本」と覚えておいて下さい。もちろん、一部の書店（地方出版社の地元や、自費出版社が自分で頼んでおいてもらっている）にある場合もあるのですが、まことに手に入りにくいものです。

書店に行けば幾らでもあるのだから、そんなことは関係ない、とおっしゃる方もいるでしょうが、書店にない本も数多く存在していることはご存知でしょうか。

（出版界では東京以外は全て地方と呼びます）、弱小出版社の刊行物と、自費出版物で占められています。

もちろん、これらの本も特殊な本なのではなく、出版社が刊行しているものに、何ら劣るところはありません。

何故くどくどと「書店にない本」の説明をしたかと言いますと、今度私達「大阪で本をつくる会」で、このような「書店にない本」ばかりを集めたらライブラリーを計画したのです。

一日約百点の新刊が出る出版界で、はつきりと縦子扱いされているこれらの本は、決して内容で劣るわけではなく、むしろ個人の力作や、長期に渡って練られ作られた地方の歴史など、商業出版には見られない本が数多くあります。本当の本好きの人には、まことにたまらない程欲しい本があるので、何しろ書店にないものでし、発行所の所在さえつかめないことも度々なのです。

「大阪で本をつくる会」は、本のみならず文化全般が、東京中心となっている現状に、腹を立てたり、不思議に思っている人の集まりです。

ですから、文化において縦子扱いされている（はつきり言えば無視されている）地方でこのような「書店にない本」を集め、いつでも公開できるようにしたい、と考えたわけです。

「書店にない本」ライブラリーは、第一期目標一五〇〇

種、常時公開、希望者には販売することとなっています。

文化において、経済力だけで差別されている現状は、

はなはだ不気味であり、情ないことではありませんか。

中央のフィルターを通して、生の情報を私達は知るべきだと思います。

出版社を含め、マスコミのほとんど全てが東京に集中している今、私達関西人は何かをすべきです。

このような意味で、このライブラリーを成功させることは、文化的、社会的に大きな意味があるものと確信しているわけです。

誰でも、自分の意見を多くの人に知ってもらいたいものです。また、その権利があるはずです。

私達は、このライブラリーを通じて、大阪と青森、熊本と広島、北海道と香川など、今まで中央のフィルターを通してしか知り得なかった、地方と地方の意識の交換や、本の洪水の中に居ながら、何故か満足を得られない本好きの人々のお役にたちたいと願っています。

ほんの小さなことかもしれません、大きな輪となつて全国に広がっていきたい、いやいかなければならない

と思っています。

全て、文化の発信源が東京であり、そこを通らねば全国に伝わって行かない、しかも、その源を握っているのは、わずか一握りの人々なのです。私達地方に住む人間が、文化について語ることさえ、その人々にとつてはダメの歯ぎしりとしか感じことなのでしょう。

ならば、ゴマメにも意地があることを、彼らに思い知らせてやろうではありませんか。私達一人一人の力は小さいものです。大阪で本をつくる会の会員も、わずか一七〇名しかおりません。

ですから、このライブラリーの成否も、他の多くの人々の力にかかっているわけです。幸い色々な地方から続々と本が届いておりますが、もっともっと充実させていくために、皆様のご協力をお願いいたします。

また、お時間がありましたら、是非一度ご覧下さい。お待ちしております。

本の港——書店にない本ライブラリー

収容数——第一期一五〇〇冊

第二期五〇〇〇冊

第三期一〇〇〇〇冊

所在地——当分の間、大阪で本をつくる会事務局

大阪市阿倍野区昭和町

開館予定日——五七年十月一日

募集する本は「書店にない本」であれば、一切他のことは問いません。細部につきましては事務局にお問い合わせ下されば、一時間でも二時間でもご説明させていただきます。

皆様のご意見、ご質問をお待ちしております。

PEARL OF SCANDINAVIA から今日は!!

平島小

バール・オブ・スカンジナビアのビジャースバーミットを逸した方にこのレポートを

ボクよりもっと熱を入れておられてご覧になるチャンス

をお送りする、ご笑覧あれ。

さ、報告がいきなり品をさげて申訳ないがパブリックル

ームの便器についてご披露しておく。YOUはワザワザ名古屋から船の便器見る為に神戸下りまでしたのかといわれても残念ながらいたしかたない、船会社ご自慢の「すべて

ファストクラス」のキャッチフレーズ、キャビンはついに見るチャンスを失した。

北欧の船内小便器は昔の日

本の小便器と同じく簡を斜にすぱっと切ったジョウゴが大きくオヤツと思う、シズクがうまく受けとれる。ロイヤル・バイキング・シリーズ（スター・シー・スカイ）の三隻もこれを使用している。日本の旧家や、古い大きい料亭で使用していたなつかしい簡型小便器だ。

北欧の多くの客船群の調度品は便器に止まらずセラミック、ガラス、木製品に括り素朴でいて工夫がこらされ日本流に表現すればアカヌケしておりハッときさせられる物が多い。

期待したバール・オブ・スカンジナビアへの夢はすぐ消えた

バール・オブ・スカンジナビアが一九八二年六月以降神戸港を母港としてオリエンタルクルーズを始めるというニュースはアメリカ発行のトライベルウイクリー十月一九日号一九八一年に写真と記事で、そして十二月五日附、昭和五七年神戸港入港予定外国客船一覧表神戸市役所発行で五回の入港も知る。気の早い人は早速日本のエージェントオール商会へ問合せる事となつたが、「日本での集

客はしない、単なる取次ぎでこちらでは何も分らない、パンフレットなどない」という返事、もともとこういう例は先にあつた。オーストラリア母港で定期的に日本をおとずれていたマルコボーロ（九二二二GT）がアキユアマリーンとして生れ変り神戸港母港中国通いしたが当

初日本での集客をせず、フライト中継地としただけに乗客の減退と共にあわてて集客はじめたが、P.R.ルートが間に合わず日本からソップをむかれたかたちで、あわれ香港でさらしものにされていた事を知つている。また、あの船なみかとあきらめるググループ、それにもめげずお得意のレターアクションでサンフランシスコへ手紙を出してパンフレットを送つてもらい、コピーしてこれがマニアに流れされた。ボクもこのコピーをもらつた一人。

これは、カーフエリーと客船のトン数計算がことなる

ここで船の生いたちを少し、マニアとご専門の方はどうしてご覧あれ。——フィンランドのカーフエリー・フィンジェット（一三〇〇〇GT）の誕生ではみ出したカーフエリー・フィンランディア（一九六七ヘルシンキ造）

Tのカーフエリーさんふらわあ11と二六六七七GT客船クングスホルムが一線に停泊したらどうみても長さ、巾、高さ共にさんふらわあ11の方が大きかつた。

さて、今年の六月になつても日本の船旅族を取扱わない代理店はそつなく応待もあいまい。勿論バッセンジ

を大改造してクルーズ客船「フィンスター」（八五八三

— 19 —

ヤーからの要求以外ボーディングバスの発行もない、しきりだからであろうが一併しこれはすべての船会社がそうであり当りまえで仕方ない。船内がみたくてわざわざQE2に乗ったという人に沢山会つたこともある船のしきたり。エージェントのプライベート以外ダメのようだ。

それでも今日は!!バール・オブ・スカンジナビア

ボートライナーの窓に顔を寄せていたら、眼下に船尾が見えてきた。四突の東側係留では珍しい。何時も係留船はすべて船首を南に右舷接岸、これはカーフェリーの後遺症か。

さて、今迄みた写真や船を目の前にしてどんなアングルが誰の目にもお気にめすか。ボクの見た限り後部上空からのプロポーションがこの船にとって一番の魅力あるボーズだと思う。以外と平凡で特徴が少く、横から見れば「正に脱皮前のカーフェリー御座候」のスタイルだ。変っているといえるファンネルも小さく、今少し誇張する

ジナビア社として誕生した国際プロジェクトチームだった。

スタッフはアメリカン・プレジデント・ライン社で客船担当をした代表取締役を始め、キャブテンはロイヤル・カリビアン・ラインのソング・オフ・ノルエー、サン・バイキング・ノルディック・プリンセス、アイランド・プリンセス、シーベンチャーのキャブテン経験者。又、ビスター・ヨーロドのコック長又、S/Sビーンダムを使って海上ホテル計画の会計検査官を務めた人。又世界の航海に人生の大半をついやしたといわれるイタリーニーのレストラン責任者、M/Sクングスホルムの航海も含まれている由。シンガポール時代のラサヤンのチーフバーサー、これでもう船内に招かざる日本の船マニア常連が入り込んでいる事がお分りかと思う。せめて船影なりとあきらめきれずおとずれた人々がたまたま顔なじみのクルーに会つて船内を見せていただくという仕組になつたわけだ。

ボクへのサービス

るとか、多くの北欧の船の如きスタイリストとはかけ離れていると思った。そうすると最初のべたようにファスト・インスピレーション後方上からのバックスタイルがこの船の代表となる美的角度というべきか。

さすがエージェントがソップ向いただけあって四突もそしてボートターミナルも人影はまばらだった。友あり、ボクは船内若干かいま見るチャンスを得た。

どうしたら船内へ入れるか

さて、船内ではごく僅かの常連船マニアが入っていた。ロイヤル・バイキングのスカルドクラブはメンバーカードでどの国どの港でも入船できる、ボクはシドニーポ港で経験した。QE2は写真入りの乗船証明書で一度のればこれも可能だ、併しこの船の場合は全く新しい船会社だ。其のナゾは直ぐとけた。

この船のオーナーは米国サンフランシスコにあり、フィンランドの手を離れコベンハーゲン（デンマーク）のJ・ローリツエン社とオスロー（ノルウェー）のI・M・スカウゲン社の合併会社バールクルーズオブスカン

クルーの大半はスカンジナビア人の由。ホテル要員の多くはヨーロッパ人とアメリカ人、スチュワーデスはフィリッピン人も含まれて居り、今回ボクが接待を受けた船首のガラフィ・ラウンジはシンガポールから勤務についたフィリッピンの小柄のウェートレスが入れ替り立ち変りサービスしてくれた。日本語はといふ間に「コンニチハ、オハヨウ、コンバンワ」そして「どうも、どうも」といふ「これはブリーズか」ときく。この辞典にない日本語のどうもは彼女のいうブリーズに違いない。これは明かにどうぞではない。そして又「モシモシアノネ、アノネ」これは一体何の歌か。日本の政治的匂のする歌だろ？六、七年前ボクは退職記念にフラウをつれてフランスのニースのせまいレストランで偶然同じテーブルで通路も横歩きせねばつかえる密着したテーブルを囲んでしかも向い会つた客同志ヒザのつかえる位で食事をした。向いの歯科医だという若い夫妻の招きで近くのアパートへ行つた時、奥さんが箱根のコンサルタントで教えられたという「モシモシアノネ、アノネ」の日本語の歌を連発した。ボクも「モシモシアノネ、アノネ」を口づ

さんでいたら、日本で買ってきたばかりというカメラでビデオとりして直ぐにテレビに写し出されてびっくりした事があつたが、ボクの歩いてきた日本の生活でこの歌に出会つたことがない。それがこの船内で、そしてこの呼びかけの歌は何を意味するのか、今もってさっぱり分らない。

さて、このガラフィ・ラウンジは天井も低く到底一万七千トンのクラスとも思わない、足りないところはこれだけの経験豊かなスタッフだからサービスでおぎなおうというのだろう。アメリカからフライテで集客し、オリエントの神秘なムードが売りものだけあって、バーメニューは古代支那の図柄はオスロ美術館提供でかざつていた。

船内バーにおいてあるお酒の事など

バーメニューによると、ウイスキーは、スコッチ六種、アイリッシュ一種、アメリカ人向けバー・ポン四種、カナダ産三種、北欧のアクアビツツもお忘れない。——北欧の船はよくリニエ（ノルウェー産）というアクアビツツだった。

さて、停泊中のしかも招かざる客としての「船旅さん今日は」の手にワインリストがないので、この船のワインの状況が分らない、一寸ワインマニアの方にはお気の毒だが、フロリダ発着のS/S、ノルウェーのディナーでもビールを飲む人が多いので、やはりアメリカ客を迎える時は、アメリカ式でカリブ航路経験スタッフの事だから先刻ご承知か。或は、オリエンタル集合で客すじが違うか、ワインリストは興味あるリトマス・テスト・ペーパーだと思う。尚たわごとながらこの船、日本酒と日本ビールを積んだらアメリカ人に受けること間違いない。

きいたコンパクトケースを造り、日本調の絵柄をいれ外人向けのシガレットでも発売すればきっとお土産になるのに。

ところで、バーリストで見る限り、世界の船旅している人には少しの不自由をかけない飲みすけに充分だけ準備されているようだ。1/120Z、4/120I、一・〇 U.S. \$～最高コニャックで二・五〇 U.S. \$、ビルはアメリカ産○・七五 U.S. \$、其の他の国産一 U.S. \$だった。

そして、船内あちらこちら
船尾の EXPLORERS LOUNGE が互垣のついたてで仕切られたBALLROOMも天井が低く、ここもカーフエリーの後遺症はまぬがれない。唯楽しかったのはBALL ROOM のショー、東川崎のノボリを四本立て、七人の侍ならず七人の少女がしばりはしまき、祭はんてん、白バッヂ、白タビ姿で、四太鼓、三タル、スピディティなカタカタ、バチバチの恵比須太鼓とやら、時にポンポンお腹に響くおおボス、たつた一人変った老人、この楽しい音の見せ場はアメリカのパッセンジャーにも通じるのか、やめようとした拍手、アンコールで充分察せられた。

又、ベランダ、プロムナード、アッパと船尾オーピンデッキを歩いて見る。上から見たら本船のハイライトボーズとみられる当り、何か日本の改造クルーズ船「さんふらわあ7」（関西汽船）のバックオーブンデッキと同じ感じ。日本の不沈長距離カーフエリー群の経営者もどんなに力を入れて改造してもせいぜいこの程度だろうか。この船参考にはならないだろう。併し I・B・M 的スパ

を積んでいた。帆船のラベルをつけ、昔ノルウェーから赤道を越えてオーストラリアに向う船に積込んだ、タル詰めが気温と航海揺れで風味が向上するのを知つて作られた。リニエとは線のことで赤道を意味する（世界名酒辞典・講談社版）このラベルの裏に運んだ船名が印刷してあった。船のバーではこういう男の酒のロマンがあった。

このアクアビツツは一頃日本でも買えたが今はもうない。この船には船名の入ったアキュアビツツはつまれてなかつた。

強いお酒はこの他、ドイツのスピリッツ、テキラ、ジン、ウォッカ、ラム。フランスの他ドイツ、スペインを揃え、リキュールやカクテールは数えるのに時間がいる位沢山。でもワインはアメリカ人はヨーロッパ人のようにならないので、名もないことわり書きして赤と白とだけ書いてある。シガレットは英國、アメリカ、ドイツ産。この船には、今海外進出で売り込んでいる日本の専売公社も日本の船マニアと同じで寄せつけない、気の

イ扱いされでは大変。

考え方せられる」と

わい、」のクルーズ計画も一ヵ年と限定されている由。其のうち半年は日本に寄港するそうだが、広く日本の船旅族に公開されてないのは何か裏があるのでないか。最近日本の消費生活物資の輸入制限関税の裏に、国内産業界の強力な反対が浮び上った日米経済摩擦の問題。「外国の客船に乗るのなら外国へでかけていったらびっくりする程割安で乗船できる」というわれわれ船旅マニアの常識、ここに日本のユージェントのからくりがあるのではないかと疑問がもたれる。この船は母港として神戸を選んでいる。今回はシンガポールからフィリッピンのスチュワーデスを入れている。日本人のクルーだつて当然門戸を開くべきだ。日本人の永年雇用の慣習がきらわれたのだろうか。ボクの手もとに「学校を出たら船に乗る仕事をしたいと思います」という少女ファンからの手紙もある。苫小牧から東京へ向った船中、「私は外国客船で仕事をするチャンスを得る為にこの船でウェートレス

をしています」と。母港にした以上若干の日本人の雇用があつてもよれそなうなものだが。併し、これも日本の何処かで誰かがブレークをかけているのかも知れない。」とになるであろう」という雰囲気でのべられているのに。外人からみて、日本は誠に神秘で不可解であるに違いない。日本人である「船旅さん今日は」からみても神秘で不可解である。

26/Jun 1982

ぶつく・えんじ

朝日出版社が『日本学術資料総目録』を十月十日に刊

行する。」の目録は国内の博物館が所蔵する美術工芸品と書跡・典籍・古文書の総目録で、日本で初めて編まれるもの。

「美術工芸篇」と「書跡・典籍・古文書篇」の二冊で構成、それぞれ十三万七千点、十六万三千点を収録している。定価は各三万円（分売可）。発行後は隔年度版と追補で最新の情報を提供していくという。また、一巻セットあるいはどちらか一巻を購入した人には、申し込みによりコンピュータに登録し、この目録に収録外の学術情報に関する検索サービス（一部有料）を電話またはコピーで提供の予定。注目される新刊だ。

* * *

秋につく標語が多いが、今年もやっぱり『読書』を加えてくださる御仁は一体いかほどか。『読書の秋』の株はあがっているのかさがっているのか、よくは知らない

が読書週間だけは確実にくる。『読書週間』が設けられてから今年は三十六回目。今年の週間は十月二十七日（水）から十一月九日（火）までで、標語は『読書はあなたの無限の宇宙』と決まった。

* * *

アメリカの書店のやり方、本の売り方を学ぶ本が十月上旬に刊行される予定だ。全米書籍商組合連合会が編集した公式の手引書の邦訳版。内容は、書店の開業から経営の仕方、流通の仕組みなど、現実のアメリカにおける書店経営、本の販売のノウハウのすべてを全六十一項目にわたって解説したもの。タイトルは『書籍販売の手引－米国書店界のバイブル』（予価一八〇〇円）、発行所は日貿出版社。

郷土誌の窓

神戸深江会館・生活文化史料室が発足して一年六ヶ月が過ぎた。この二月には「史料室だより」（第二号）が発行され、この間の経緯や史料紹介、田辺真人さんの「深江の歩みと街かどの史跡」なる文章が出ている。

この生活文化史料室から八月に田辺真人編著「神戸の歴史ノート」が発行され、当店でもお預りすることになった。この二〇ページの小冊子は、「あとがき」によると、はじめ神戸市の新規採用職員のための研修教材として編まれたもので、その後各方面からの要望が強く公刊する運びとなった由。内容はその名の通りノートで、説明は概略だけで図表や年表で構成されている。定価は、さきの「史料室だより」を付して二〇〇円。

* * *

垂水区に連絡先をもつ冬鶴房（とうじやくぼう）から七月に『坂道にて』（八〇〇円）、八月に『神戸港の歴史』（八〇〇円）が出た。

六月に刊行された本だが、見のがせない『野鳥ものがたり—京阪神の水辺の鳥—』を紹介しよう。こういう方面は、もうまったく不案内で“紹介”とはいうものの、目次とその周辺を抜き書きするしか能がないのをご寛恕願いたい。著者は坂根千（さかね・もとむ）さんで日本鳥学会会員、兵庫野鳥の会事務局長。この本は坂根さんの三十年余にわたる京阪神の鳥類についての調査記録をまとめたもの。直接には、昭和五十四年十一月から昭和五十六年七月の間、八十回にわたって阪神サンケイ新聞に連載されたもののうち、非スズメ目の水鳥、水辺の鳥について書かれたものを種類ごとに整理された本。ハガソカモの仲間）に始まり、ハシギ・チドリの仲間）ハカモメの仲間）ハカイツブリの仲間）ハクainaの仲間）ハカワセミの仲間）ハサギの仲間）ハトキの仲間）ハコウノトリ」という順。実におびただしい鳥たちについて書かれている。それでもここ三十年の間にわざった京阪神の自然の変化は急激で「生活圏を失った水辺の鳥は非常に多い」という。京阪神の鳥の本として貴重な一冊だ。

○〇円。

* * *

『坂道にて』は副題に「今、自立にむけて—保健婦六人の記録から」とある。六人の女性である保健婦たちが仕事、生活、家庭、愛に真正面からぶつかって、六人六様に思い感じたことをつづった本だ。女性の自立について考えさせられる。長田高校の浅田修一さんが、この六人の女性の文のあとに「もう一つの坂道—今、生きるといふこと」という文を載せておられる。この浅田さんの文章が抜群に良い。ただ、書きこまれた内容を生きることができるとどうかは、僕にははなはだ心もとないのだが…。“思想はそれを生きなければ本ものではない”という真下信一さんの言葉をふいに想い出した。

『神戸港の歴史』の著者は西川光一さんで、昭和二年まで神戸港湾博物館長を務めてこられた人。この本は神戸港の成り立ちとその発展を、古代から明治期まで辿った本。神戸が日本の歴史の中で担った役割についても触れられていて、読みやすさと相まって、長く読みつがれていくことだろう。先に海文堂出版から刊行された『神戸港一五〇〇年』とともに貴重なミナトの本だ。

* * *

『神戸港の歴史』（八〇〇円）

『坂道にて』（八〇〇円）

『鳥の仲間』（五〇〇円）

『神戸の仲間』（三五〇円）

『遠かなり墓標』（四八〇円）

『論説記者』（四九〇円）

『裸の記者』（五〇〇円）

『ドライブえんま帖』（三三〇円）

『神戸の一〇〇人』（八七〇円）

『縮刷版・神戸新報I』（五〇〇〇円）

『縮刷版・神戸新報II』（五〇〇〇円）

『縮刷版・神戸新報III』（五〇〇〇円）

『縮刷版・神戸新報IV』（五〇〇〇円）

『縮刷版・神戸新報V』（五〇〇〇円）

兵庫鳥類研究所の発行で、発売はたら書房。定価一五

『地名にみる生活史』（一一〇〇円）

＊ * *

『坂本遼児童文学集・かきおきびより』（一一〇〇円）が駒込書房から出されて、一冊だけ入ってきた。その風体が気になって手にとることになった。手にしてみると、この本は足立巻一さんや、竹中郁さんが関わった『きりん』に掲載されたものを一本にまとめたものであることがわかった。坂本さん自身も朝日新聞の論説委員でありながら、『きりん』に送られてくる児童の作文の選評をされ、さらには童話を書いて発表されたことが、この本の別刷付録の足立巻一さんの文に出てている。坂本さんは兵庫県加東郡東条町の出身で一九七〇年に他界される。一読をおすすめしたい。

＊ * *

神戸新聞出版センターからは国際文化交流誌「道」の編集主幹・森晴秀さんの名エスコートで『神戸を語るえとらんぜ』（一一〇〇円）なる対談集が出版された。神戸に住む外国人たちが語る、日本という国、神戸というまち。聞き手がうまいと語る方も油がのるようだ。

同センターからは八月に入って、直井潔さんの小説、『心の小舟』が刊行された他、下旬には、モノトーン中心の素晴らしい写真集『姫路城』が発行された。朝日新聞社や姫路の中央出版などから姫路城の本が出ているが、写真 자체の持つ迫力というか存在感がまるで違う。長く残る本となるだろう。

＊ * *

兵庫県会の副議長小久保正雄さんの本『県会議員のひとり言』（九〇〇円）が出版され、当店でお預りしている。発行所は議会ジャーナル社。海外で見聞したことや、政治の世界についての感想などが「評論」という背広を脱いで語られている。議会ジャーナル社刊の議員本としては、尾崎光雄さんに次いで二冊目になる。

＊ * *

郷土の研究誌「歴史と神戸」（一一三号）は『淡路特集』。それも、浜岡きみ子さんの論文を四本組んでいる。論文名を記すと順に「淡路の棟附帳」「宗派の対立と村落」「幕末淡路における倒幕運動と東山寺」「北淡路における遺跡概観」となる。論文の後には実におびただし

い浜岡さんの著述目録が記載されている。『淡路特集』以外では、三船清さんの「盗用された神戸商店街復元図」が記載されている。

＊ * *

八月十五日の神戸新聞に、『葺合区のあゆみ』『生田区のあゆみ』の二冊の区史が刊行されたことが出ている。昭和五十五年十二月の合区までの歴史をつづったものだ。記事によると、合併前の五十五年五月、区役所の職員が消え行く両区の歴史を後世に伝えようと資料収集をはじめ、二年がかりで作成した労作。葺合区は市が区制をいた昭和六年、八区の一つとして生まれ、生田区は終戦間際の二十年五月、空襲に備え一区一警察署体制を取るために区の改正を行ったのに伴い、湊東・湊の両区を合わせて誕生した。この二冊の区史はB5判で、百四十一百六十ページ。入手ご希望の方は中央区役所にお問い合わせください。

定価四千五百円。

（N）

七月二十一日の神戸新聞に、『カタツムリの図鑑を出版』という二段の記事が出ていたのが目についた、著者

海文堂案内版

○○冊▼を開催中です。九月十五日からは場所を移して展示します。

★新刊コーナーの平台で、▲新潮社のハードカバー・人間三六〇度▼を開催中です。八月二十九日乳ガンとの闘いの中に死去したバーグマンの『マイ・ストーリー』他、『男どき・女どき』『流離譚（上・下）』『ながい旅』『吉里吉里人』など新潮社のえりぬきのハードカバー本が勢揃い。この機会にへ本らしい本とお出会い下さい。

★文庫ゾーンでは、講談社文庫の、夜をねむれなくする本ばかり集めた▲フェア・オブ・フェアズ▼を開催中です。九月末日までの予定です。また、早川文庫の▲ساسペンスフェア▼、角川文庫の▲つかこうへいフェア▼、▲角川文庫スーパーベスト▼（全二三冊）▲幻魔大戦フェア▼を開催しています。

★二階売場では▲ロボットを考えるミニコーナー▼を作りました。点数はまだ少しですが、興味のある方はお立ち寄りください。

★ブックプラザでは▲疑惑戦線・松本清張の本ベスト一

9月15～30日 サイマル出版会

10月1～15日 葦書房

10月16～31日 津軽書房

11月1～15日 家の光協会

11月16～30日 ▲日本に伝わる大衆芸能の世界▼

12月1～15日 N.R.の会

12月16～31日 現代史出版会

1月3～15日 恒文社

1月16～31日 社会思想社

2月1～15日 時事通信社

2月16～28日 思索社

3月1～15日 青土社

3月16～31日 弘文堂

★二階ギャラリーでは、九月十三日から十九日まで▲中国の切り絵展▼（中国総領事館後援）、九月二十日から二十六日までは▲絵本原画展▼を開催いたします。共に充分にお楽しみいただける内容です。お気軽にご来場ください。十月に入りますと、二日から八日まで▲光風会会員・河本和子個展▼（油彩とデッサン）、九日から十七日まで▲倉掛喜八郎ベン画展▼（帆船の世界）を予定しています。

★今まで新刊ゾーン内に展示していました楽譜類は雑誌ゾーンの『音楽・カメラ・映画誌』のコーナーに移しました。